

診断、治療ともに進歩しているアレルギー・リウマチ性疾患

—疾病を持ちながら通常の日常生活が送れます—

免疫異常とは？

免疫は本来外敵から自己を守る仕組みの一つです。

一方、免疫が過剰に働くのがアレルギーで、外敵でなく自己の身体成分に対して免疫反応がみられるのが自己免疫疾患です。これらの免疫異常についての学問は 20 世紀後半に著しく進歩しました。21 世紀に入って更に治療の分野で進歩が見られています。

アレルギー疾患リウマチ科では、過剰な免疫反応がみられる気管支喘息、アレルギー性鼻炎、蕁麻疹、薬剤アレルギー、アナフィラキシーなどと、自己免疫現象がみられる膠原病、関節リウマチ、血管炎などを診療します。後者は「リウマチ性疾患」と総称されます。関節リウマチ患者さんは全国に 70~80 万人も居ます。血管炎の多くは高齢者の病気で、高齢社会化と相俟って増えています。

「リウマチ性疾患」

膠原病は、半世紀前は稀少な難病とされ、1973 年に始まった国の難病(特定疾患)対策対象に含まれました。2015 年初頭に対策は刷新され、対象が 330 疾病に広げられました。関節リウマチ以外の殆どの膠原病は対象とされていますが、診療費補助についてはそれぞれの患者さんの重症度によることとなりました。

実際、正確な診断の下に過不足ない治療が行われれば、「難病」のイメージは必ずしも当たらなくなっています。合併症、副作用についても感染症、薬剤障害とも経験が積まれて回避・回復され易くなっています。



早期関節リウマチ患者さんの手の MRI 画像。
白く見える部分が炎症。



別の関節リウマチの患者さんの手首の関節エコー画像。
滑膜が厚く血流の増加（黄色）が見える。

「アレルギー疾患」

アレルギー疾患の代表とされてきた気管支喘息の死亡数は、1950 年代には 1 万数千人でしたが漸次減じ、1995 年以降更に減じて 2013 年には 2000 人を切るに至りました。しかし、アレルギー性疾患の患者数自体は増えていると想定されます。特に食物アレルギー、薬剤アレルギーが多く認められるようになり、最もきついアレルギー現象であるアナフィラキシーは増えているとされます。アナフィラキシーは、強い蕁麻疹のみでなく、ショックや呼吸障害を伴って意識消失、失禁にまでも至ります。発現時の自己注射が広く処方されるようになっています。

アレルギー・リウマチ性疾患は今や診断、治療とも進歩して、疾病を持ちながら通常の日常生活を送れるようになっています。